



54

おらがネーパ ビルはエコタウン、 アメリカの草の根底力

ネーパービルに住み始めて4ヶ月が経った。フルブライト財団が米国の大学で地球環境を講じる人を募集していることを偶然見て、もともとお金を払ってアメリカで環境を勉強してみたいと思っていたところなので、応募し、そして運よく受かった、というのが経緯である。けれども、ここにはたまたまた来たのではなく、来るべくして来たのではないかと最近では感じるようになった。この市がとても環境に熱心であることを知るにつれてそうした確信を深めている。

秋学期、筆者の「地球環境管理」の講義に、外部講師として同市の職員をお呼びした。学生に、地球環境を守るために足元で何が行われているかを理解してもらい、地球の話が自分事になればと思った。そこで、筆者自身も初めて同市のエコ自慢を聞くことになったが、感動的であった。日本国内のエコな自治体ははばくまなく廻った経験からみて、一級品だったからである。

講義に来てくださったのは、公認プランナー(AICP)の資格を持つアミー・エメリーさんで、交通・環境・開発部に籍を置いて、戦略的に重要な全市的な事業を監督するスーパーバイザーに任じられている。

エメリーさんは、この市が、緑を大切にしている長い歴史を持つことから講義を始めた。ここは、中西部の大平原(プレーリー)に属するので森林はとても貴重であったため、1915年に森林保護区を作った上で、1966年には、公園部局を、日本で言えば知事部局であることを止めて、独立組織とした。市長の政見に左右されず着実に緑が守られるようにとの判断であって、教育が教育委員会により監督されることを思っていただけとよい。全米で進められている「緑のまち」認定も、早い段階(1990年)で獲得している。廃棄物分野でも、家庭から出てくるリサイクル可能物の集団回収を、アメリカ国内では極めて早い1986年に開始し、家庭や商店からの有害廃棄物の回収センターも70年代に設け、2015年からは新施設を設けて市外物の受け入れも始めた。電気自動車のための充電設備の整備、上水道の漏水を減らすことでの経費とCO₂の削減、主に通勤者を対象としたパークアンドライドや、市の繁華街への訪問客への駐車誘導の仕組みとミニバスのような公共的な移動手段の整備なども着々と進めている。

2005年には再生エネルギー導入に関する計画が、07年には温室効果ガスのインベントリーが作られ、さらに、徹底的な市民との対話に基づき、12年には、市の環境・持続可能計画が作られ、実行に移された。これは、環境・経済・社会の全分野を十分にカバーするものであった。

こうした中、10年からは、市内全域約6万カ所の電力メーターがスマートメーターに替えられたうえで、電力供給の需要追従を一層無駄なく行えるように制御するスマートグリッド化が実施された(写真は筆者が住む集合住宅のスマートメーター群)。アメリカにはよくあるが、ネーパービル市の電力供給は市役所の公営事業として行われている。

同市の場合には、翌日の電力消費予測などもしっかり行い、また、短期の電力購入なども効率化することで、無駄に高い電圧での給電を避け、

さらに、メーターを人が読み取って課金する仕組みも止められて人件費も減り、市にとっては、15年間で3400万ドルの節約になる計算であった。実際は、年々、2~3%の電力供給量の削減ができ、予測以上の効果があったようで、市の投資額1100万ドル(この他に連邦補助が同額あった)は、4年ほどで回収できたようである。もちろん、無駄な電力供給が減ったので、同率でCO₂の間接排出も減ったはずである。この成果などについては稿を改めてもう少し詳しく報告したい。たまたま住むことになった自治体がこんなに環境に熱心なことに運命的なものを感じるのである。



小林 光

元環境事務次官、慶應義塾大学政策・メディア研究科特任教授、博士(工学)、現在は、ノースセントラル・カリフォルニア(米国イリノイ州)フルブライト財団派遣教員。